古代南アラビア碑文中の 'rb ('rb)

薮 勇 造

'rb ('rb) dans les inscriptions sud-arabes

Yūzo SHITOMI

Le caractère de la société et de la culture de l'Arabie du Sud ancienne, qui florissaient depuis plusieurs siècles au bord du Ṣayhad désert, a commencé à changer de diverses manières vers le milieu du premier siècle de notre ère. L'un des principaux changements est la bédouinisation de cette région où dominait jusque là la population sédentaire agricole.

Ici, nous avons essayé d'examiner tous les exemples du mot 'rb ('rb) dans les inscriptions sud-arabes anciennes pour aborder une étude sur la bédouinisation de l'Arabie du Sud. Mais la petitesse de cet article nous a forcés à nous borner à citer les exemples par ordre de priorité. Pour les discuter en détail, nous avons l'intention de publier un autre article.

Suivantes sont les inscriptions contenant dedans le mot 'rb ('rb) :

CIH 79/9—10 ; 343/14 ; 350/9 ; 353/10 ; 397/8 ; 541/49, 65

Gl 1177/5, 7

Ir 12/2, 3 ; 32/7, 12

Ja 560/10 ; 561 bis/11, 12—13, 13 ; 629/7—8, 33 ; 635/34 ; 665/2, 3, 13 ; 671/10 ; 739/9 ; 758/9 ; 950/2 ; 961/2 ; 1028/7 ; 2110/9

NaNAG 13—14/1, 2, 3

Ry 507/2, 8, 9 ; 508/7 ; 509/9 ; 510/4—5, 7—8

Sh 32/11, 14

アラビア半島南西部のオアシス地帯を中心に栄えた古代南アラビアの社会と文化は、西暦1世紀も半ばを過ぎる頃より徐々にその性格を変えていったが、中でも最も重要な変化の一つが、元來定住農耕民が支配的であったこの地域のベドウィン化⁽¹⁾である。しかし一口にベドウィン化と言っても、南アラビアのそれには、互いに関連を有する二つのケースがあった。即ち、一つは土着の定住農耕民が遊牧民化し多くは北へ移動するケースであり、もう一つは南下した北アラブ系のベドウィンが南アラビアに侵入・定着するケースである。後者の場合には、さらにこれを、侵入したベドウィンの変質＝定住民化と、彼等を受け入れることによる南アラビア社会の変質という二つの側面から捉える必要があろう。

本稿では、以上の問題と取組むための予備作業の一つとして、古代南アラビア碑文の中における 'rb (pl. 'rb)⁽²⁾ の用例の検討を試みた。ただ、時代順に用例を列挙するのみで与えられた紙幅が尽きてしまったので、これらの用例の比較・検討と整理・総合の作業は別稿において行なうこととする。

尚、本稿でとりあげるテキストに関するデータと王号の略号は、表にまとめて稿末に掲げた。また、利用した主要文献と稿中におけるその略号は下記のとおりである。

ASB: *L'antica società beduina* (F. Gabrieli ed.), Roma, 1959.

BeCRCAEA: A. F. L. Beeston, "CR de W. Caskel, *Entdeckungen in Arabien*", *Orientalia*, N. S. XXV, 1956, 292—302.

BeKASA: Id., "Kingship in Ancient South Arabia", *Journal of Economic and Social History of the Orient*, XV, 1972, 256—268.

BeQ: Id., *Qahtan, Studies in Old South Arabian Epigraphy*, Fasc. I: *The Mercantile Code of Qataban*, London, 1959.

Fasc. III: *Warfare in Ancient South Arabia*, London, 1976.

CIH: *Corpus Inscriptionum Semiticarum. Pars Quarta: Inscriptiones himyariticas et sabaeas continens*, I-III, Paris, 1889—1930.

DoJaNSI: B. Doe & A. Jamme, "New Sabaean Inscriptions from South Arabia", *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1968, 2—28.

EI¹: *Enzy. Is.*, III, 1936.

EI²: *Ency. Is.* (new ed.), I, 1960.

HiHA: P. K. Hitti, *History of the Arabs* (9th ed.), London, 1967.

HöBVAI: M. Höfner, "Die Beduinen in den vorislamischen arabischen Inschriften", *ASB*, 53—68.

JaMAA: A. Jamme, *Miscellanées d'ancien arabe*, I-VII, Washington, 1971—1974,

JaPIRM: Id., "The Pre-Islamic Inscriptions of the Riyadh Museum", *Oriens Antiquus*, IX-2, 1970, 115—139.

JaPRHU: Id., *A propos des rois ḥaḍramoutiques de al-'Uqlah*, Washington, 1965.

JaRSRI: Id., *Research on Sabaean Rock Inscriptions from Southwestern Saudi Arabia*, Washington, 1965.

JaSHI: Id., *Sabaean and Hasaeen Inscriptions from Saudi Arabia*, Roma, 1966.

JaSIMB: Id., *Sabaean Inscriptions from Maḥram Bilqīs (Mârib)*, Baltimore, 1962.

JaUT: Id., *The Al-'Uqlah Texts*, Washington, 1963.

MüSGKS: W. W. Müller, "Eine sabäische Gesandtschaft in Ktesiphon und Seleukeia", R. Degen, W. W. Müller und W. Röllig, *Neue Ephemeris für Semitische Epigraphik*, II, 1974, 155—165.

PiIRy 535: J. Pirenne, "L'inscription Ryckmans 535 et la chronologie sud-arabe", *Le Muséon*, LXIX, 1956, 165—181.

PSAS: *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies*.

RES: *Répertoire d'épigraphie sémitique*, V-VIII, Paris, 1928—1968.

RoPH: Ch. Robin, "Le problème de Hamdân: des qayls aux trois tribus", *PSAS*, VIII, 1978, 46—52.

RodES, M. Rodinson, "Éthiopien et sudarabique (rapport sur les conférences)", *Annuaire, Ecole Pratique des Hautes Etudes (IV^e Section)*, 1965/1966, 125—141 ; 1966/1967, 121—139.

- RyISA: G. Ryckmans, “Inscriptions sud-arabes”, I-XXII, *Le Muséon*, XL-LXXVIII, 1927—1965.
- RycH: J. Ryckmans, “Himyaritica”, I-V, *Le Muséon*, LXIX-LXXXVIII, 1956—1975.
- RycIHS: Id., “Inscriptions historiques sabéennes del’ Arabie Centrale”, *Le Muséon*, LXVI, 1953, 319—342.
- RycISA: Id., “L’inscription sud-arabe Nami NAG 13—14”, *Eretz Israel*, IX, 1969, 102—108.
- SchSI: B. Schaffer, *Sabäische Inschriften aus verschiedenen Fundorten*, Wien, 1972.
- SmEA: S. Smith, “Events in Arabia in the 6 th Century A. D.”, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, XVI, 1954, 425—468.
- WisGL: H. von Wissmann, *Zur Geschichte und Landeskunde von Alt-Südarabien*, Wien, 1964.
- WisHAH: Id., “Ḥimyar, ancient history”, *Le Muséon*, LXXVII, 1964, 429—497.
- WisKO: Id., “Zur Kenntnis von Ostarabien, besonders al-Qaṭif, im Altertum”, *Le Muséon*, LXXX, 1967. 489—512.
- WisHöBHG: H. von Wissmann & M. Höfner, *Beiträge zur historischen Geographie des vorislamischen Südarabien*, Mainz, 1953.

1. Ja 560

アッワーム (‘Awwām) 神殿のイルムクフ (‘Ilmuquh) 神への奉献文。8—10行目において奉献者達は、「ベドウィンの地 ⁽³⁾’rd/’rbⁿ」における任務を無事遂行できたことを、イルムクフ神に感謝している。10—15行目にその任務の内容が記されており、ビーストン (*BeQ*, III, 57—58) はこれを「マーリブの田園部に配属されていたベドウィン傭兵隊が、ラクダと共に砂漠へ去ったので、これを探索して捕えマーリブへ連れ戻すこと」と解している。⁽⁴⁾「ベドウィンの地」が具体的にどの方面をさしているかの手懸りは、テキスト中には見出せない。ビーストンが「砂漠」と解したのは推測にすぎず、後出の Ja 561 bis や CIH

343 に照らして、必ずしもそうとばかりは言えぬ。

2. Ja 561 bis

アッワーム神殿のイルムクフ神への奉献文。10—14行目によると、奉献者達は、ハーシド (Hāšid) 部族⁽⁵⁾の境界において、また「ベドウィン——彼等 (奉献者達) の主君たるサバ王に害をなすベドウィン——の領域 'rḏt/'rbⁿ/'rb/ht'w/b'mr'hmw/'mlk/Sb'」において、さらにサバ王の諸部族の領域において、「ベドウィン''rbⁿ」と戦った。ハーシド族は、奉献者達の属するハムダーン (Hamdān) 氏族⁽⁶⁾によって支配されている部族で、サバ西部の高地帯の一角を領域としていた。当時ベドウィンが砂漠沿辺のオアシス地帯を越えて、その西方の高地帯の定住民にまで脅威を与えていたことが窺える。

3. CIH 343

カドゥマーン (Qadumān) 神殿のターラブ (Ta'lab) 神への奉献文。14行目によると、奉献者達は「ヒムヤルとベドウィンの地 'rḏ/Hmyr^m/w'rbⁿ」において戦った。ヒムヤルは、サバの南西方の高地帯と紅海・アデン湾の沿岸部を領有する勢力で、当時サバと連合国家を形成していたが、後述するよう⁽⁷⁾に、折しもこの頃サバでは部族間の覇権争いが激化しつつあり、ヒムヤルもこの争いに加わってサバ諸部族との間にしばしば戦いを交えていた。「ヒムヤルとベドウィンの地」という表現は、ヘフナー (HöBVAI, 60) も述べているように、ヒムヤル領内に当時既に相当数のベドウィンが存在し、ヒムヤル軍の重要な構成要素となっていた事情を示すものと解してよいのではなからうか。

4. Ja 629

アッワーム神殿のイルムクフ神への奉献文。テキスト全体を通じて、サバと、ハドラマウトを中心とする諸勢力との戦いの経過が記されている。後者はハドラマウト王とカタバン王に率いられた諸部族の連合軍で、ベドウィンもこれに加わっていた。まず6—8行目によると、サバ南方の高地帯に位置するラドマーン (Radmān) 部族の領域における戦いで、「ベドウィン ''rb」はサバ王の敵の一つとして名を挙げられている。また33—34行目には、カタバンの首都

ティムナにおいて「ハドラマウト人とベドウィン 'ḥḍr/w'rb」の連合軍とサバ軍の間に戦いの交されたことが記されている。ハドラマウトやカタバンの領内においてもベドウィンの浸透が進み、殊に軍事的に重要な役割を果たしつつあったことが窺える。

5. CIH 353

Ḥḏṭnn 神殿のターラブ神への奉献文。奉献者達は「バタ・ハムダーン氏族 bny/Bt'/wHmdn」の Yrm/'ymn の臣下。ハムダーン族は既述の如くハーシド部族の支配氏族、同様にバタ族はハーシド族の南隣のフムラーン (Ḥumlān) 部族の支配氏族。ハムダーン、バタ両氏族の間にはこの頃 (2世紀) より密接な関係が生じ、⁽⁸⁾ 後者は次第に前者に吸収された。尚、ハーシド、フムラーンの両部族は、ハガル (Hagar) という他の一部族とともに、Sm'y というより大きな部族を形成していた。ところでテキストは右側に欠損部があるため、正確な内容とはつかめないが、9—15行目によると、奉献者達は「ライダの人々、⁽⁹⁾ Sfln⁽¹⁰⁾ の 'šr⁽¹¹⁾、マーリブのベドウィン、⁽¹¹⁾ D'bn⁽¹¹⁾ 'rydⁿ/w'šr/Sfln/w'rb/Mrb/wD'bn」⁽¹¹⁾と戦ったようである。攻防の中心となっているライダはハーシド族の西境に隣接する町で、その住民はバキール (Bakil) 部族に属していた。当時サバでは、東部オアシス地帯の伝統王朝の衰退に乗じて、西部高地帯の諸族とヒムヤルが覇権を巡って争い、有力氏族の首長達は夫々王号を僭称していた。このテキストの作られた頃は、バキール族の支配氏族の一つマルサド (Martād) 族の首長 S'dšmsm/'sr' 父子の力が強く、首都マーリブも彼等の支配下に置かれていたようであるが、この後しばらくして覇権はバタ・ハムダーン族の手に移り、首長の Yrm は「サバ王 MS」と称するようになる。テキストのライダを巡る戦いは、このようなバタ・ハムダーン、マルサドの両氏族、及びこれらに率いられた Sm'y、バキール両部族の間の覇権争いの一コマであったと思われる。そしてこの戦闘に「マーリブのベドウィン」が後者側から参戦したのは、当時この首都を支配していたのが、S'dšmsm 父子であったからであろう。本稿のテーマから見ると、サバの首都にベドウィン部隊が駐屯し、王の指揮に従っていたという事実が興味深い。

6. GI 1177

Kbd^m 神殿のターラブ神への奉献文。奉献者達は、5行目には「ベドウィン 'rbⁿ」と、また7行目には「Sfln 及び彼等とともに居るベドウィン Sfln/wdkyn/kwnhmw/bn/'rbⁿ」を相手に戦ったと記されている。彼等の属するスハイム (Suhaym) 族は、先に触れたハガル部族の支配氏族であったので、CIH 353 の場合同様、ここでも Sfln は Sm'y 族に敵対していることになる。このテキストでは、Sfln にもベドウィン部隊が属していたことを伝える7行目の記事が重要である。おそらくこのベドウィン部隊が、CIH 353 の 'sr/Sfln に相当するのであろう。

7. CIH 79

ヒッラーン (Hirrän) 神殿のイルムクフ神への奉献文。8—10行目によると、奉献者は Mnht^m において「ベドウィン 'rbⁿ」と戦った。ヒッラーン神殿には多数の青銅板刻文 (CIH 73—96) が奉献されているが、これら一連の奉献文の内容の検討を通じて、当時アムラーンが隊商交易で繁栄する商人都市であったとの印象を受けたヴィスマン (WisGL, 354—356) は、CIH 79 の奉献者も商人で、ベドウィンとの戦いの記事は、彼の率いる隊商がベドウィンの襲撃を受けた事実を伝えるものと解し、Mnht^m をメッカの東北東に位置する Ri' al-Manhūt 峠に比定している。

8. NaNAG 13—14

現在サヌア博物館に所蔵されているこの碑文は、欠損部の大きいこともあって内容に不明な点が多いが、ヒムヤルが周辺諸勢力の侵略を撃退した模様が語られているようで、テキストの作者は前者の成員と思われる。⁽¹²⁾反ヒムヤル連合軍は、サバ、ハドラマウト、この両者の中間の旧カタバン領の諸部族、それに⁽¹³⁾アビシニア (Hbšt) の軍勢から成っていた。このうち、1行目によるとサバ軍には「サバ王のベドウィン 'rb/MS」部隊が、また2行目と3行目によるとハドラマウト軍には「ハドラマウト王のベドウィン 'rb/MH」部隊が、夫々加わっていた。

9. CIH 350

ラフバーン (Raḥbān) 神殿のターラブ神への奉献文。奉献者はおそらくハーシド族の成員と思われるが、8—10行目によると110人の「ベドウィン ^{'rbn}」部隊を率いてバーリク (Bāriq) 族の攻撃に向かっている。バーリク族はアシール地方の部族とのことであるが、⁽¹⁴⁾7行目に見えるアビシニア人とともに南下して、ハーシド族に脅威を与えていたのであろう。

10. Ir 12

アッワーム神殿のイルムクフ神への奉献文。奉献者は、王の命を受けて数年間ハーシド族の境界警備の任にあった。ベドウィン関係の記事を拾うと、まず2行目より、この頃ハーシド族の領内に ^{d'bnw/'rbn} が在住していたことが窺える。ビーストン (*BeQ*, III, 3) は初期イスラム時代の *al-'Abnā'* の用法との比較に基いて、これを “second-generation immigrants” と解した。未だ一つの仮説にすぎぬにしても、この見解に従えば、ハーシド族領に侵入移住したベドウィンも、この頃には当地で生まれた新しい世代の時代を迎えていたことになり、南アラビア社会へのベドウィンの定着過程を考える上で極めて興味深い。2行目の末尾から3行目の冒頭にかけて、アビシニア軍がハーシド族領西方の ^{W'r^m} の谷を侵したのに対し、奉献者が「ベドウィン」⁽¹⁶⁾部族を指揮してこれを逐ったことが記されている。当時サバのいわば国境警備隊の中核はベドウィン部隊によって占められていたのである。この ^{W'r^m} を巡る戦いに⁽¹⁶⁾関連してもう一箇所「ベドウィン」に言及した部分があるが、ビーストン (*BeQ*, III, 24) がこれをアビシニア軍とともに ^{W'r^m} に侵入したベドウィンととるのに対し、J. リックマンズ (*RycH*, III, 246) は ^{W'r^m} においてアビシニア軍の攻撃にさらされたベドウィンととっている。原文未見の筆者には、いずれが正しいかの判断はつかず、両説を紹介するにとどめる。

11. Ja 635

アッワーム神殿のイルムクフ神への奉献文。奉献者がサバ王 ^{Š'r^m} に従って、サラート (*Sarāt*)⁽¹⁷⁾ 地方より中央アラビアにかけて転戦した模様が記されている。25—28行目によると、中央アラビアのカルヤ (*Qarya*) の町では、この町

の住民と、「キンダ⁽¹⁸⁾とカフターンの王たるサウル族のラビーア Rb't/d'īTwr⁽¹⁹⁾m/Mlk/Kdt/wQḥtn」がサバ軍の攻撃を受けている。族名を導く 'l ('āl), 及び族的帰属を示す d'l (dū-'āl) という表現は、南アラビア固有のものではなく、⁽²⁰⁾前イスラム期において南アラビアの氏族なり部族なりをさすために用いられたことはなかった。したがって、サウル族は、北方系の氏族（もしくは部族）であったと思われる。他方キンダは、元来ハドラマウト付近に居た南アラビア系部族が、ある時期に中央アラビアに移動したものと一般に理解されている。本テキストとはほぼ同時代の Ja 576/2 に š'bⁿ/Kdt とあるのを見ると、この当時（200年前後）の南アラビアでは、キンダが彼等と起源を等しくする人々であることが、まだ明確に意識されていたのであろう。しかしそれでは、キンダは移住地において、自らとは系統を異にする王の支配を受けていたのであろうか。また、キンダを š'b と呼んでいる史料はこの他にはなく、後世の史料では専ら 'rb と呼ばれているという事実は、彼等のベドウィン化の進展を物語っていると解してよいのであろうか。キンダについてはこの他にも検討すべき多くの問題点があり、いずれ稿を改めて詳細に論じてみたい。

さてサバ軍の戦いに話を戻すと、32—37行目には、奉献者が王により、Yḥbr の 'šrt を討つためにアスド族 ('l'sd)⁽²¹⁾ 領の境界のスマール (Tumāl) オアシス⁽²²⁾の近くへ派遣されたことが語られている。この時奉献者が率いた軍勢は、ハウラーン部隊、ナジュラーン部隊、「ベドウィン 'rbⁿ」⁽²³⁾部隊の3部隊で編成されていた。

12. Ja 2110

アッワーム神殿のイルムクフ神への奉献文。7—10行目によると、奉献者はサバ王により北方の王達の許へ使節として派遣された。⁽²⁴⁾その王達とは、アサド ('sd)⁽²⁵⁾の王アル・ハーリス (al-Ḥārit) と、「キンダとマズヒジュとベドウィンの王 Mlk/Kdt/wMḏḥgm/wḏbn/'rbⁿ」⁽²⁶⁾マーリク (Mālik) であった。後者は先に挙げた Ja 576/2 に見える Mlk^m/Mlk/Kdt と同一人物であろうが、ここでは既述の如くキンダは š'b と呼ばれている。したがってマーリクの王国は、南アラビアからの移住者とベドウィンという系統を異にする二つの要素から成っていたと思われるが、これは Ja 635 より窺えたラビーアの王国の事情

と一致する。

13. Ja 739

アッワーム神殿のイルムクフ神への奉献文。奉献者はバキール部族の支配氏族の一つ Kbr'qyn^m 族の Nmrn/'wkn の臣下。9—10行目に、南東方の旧カタバン領で「ベドウィン 'rbⁿ」を相手に戦ったと記されている。

14. Ja 758

アッワーム神殿のイルムクフ神への奉献文。奉献者は、Ja 739 のそれと同じく Nmrn/'wkn の臣下。8—9行目に、やはり旧カタバン領において「ベドウィン 'rbⁿ」を相手に戦ったことが記されている。

15. Ja 950

ウクラにおいて行なわれたある儀式（内容不明）の参列者が記念に残した岩石刻文。彼は 'mr^m の息子で名を 'tybt といい、「高官 mqtwy」の地位にある「ベドウィン 'rbyⁿ」であった。mqtwy⁽²⁷⁾ の用例は軍事的内容に限定されないが、ここではやはり「高級士官・将校」に相当する意味で使用されているのであろう。'tybt はハドラマウト王に仕えるベドウィン部隊の隊長の一人であったと思われる。

16. Ja 961

テキストの性格は Ja 950 に同じ。参列者は Gdwt と Šnd^m という名の「二人のベドウィン婦人 'rbytyⁿ」であった。

17. Sh 32

アッワーム神殿のイルムクフ神への奉献文。10—19行目にサバ⁽²⁸⁾軍のハドラマウト遠征の様子が語られている。10—11行目によると、遠征軍の一部は「ベドウィン 'rbⁿ」部隊によって編成されていた。そして14行目によると、このベドウィン部隊の少くとも一部は「キンダのベドウィン 'rb/Kdt⁽²⁹⁾」によって占められていた。「キンダのベドウィン」とは、先に触れたキンダとともに王国

を形成していたベドウィンのことであろうか。それとも移住地においてベドウィン化したキンダをさすのであろうか。また、一旦北へ移動したキンダ、もしくはそれと結びついたベドウィンが、再び南下してサバ王に従っているというのも興味ある問題である。ヴィスマン (*WisGL*, 404—405) の主張するように、彼等を南へ逐ったのは、ナマーラ (an-Namāra) 墓誌に見えるヒーラのイムルルカイス ('Imru' al-Qays) の遠征軍であったのかもしれない。⁽³¹⁾

18. Ja 665

アッワーム神殿のイルムクフ神への奉献文。テキスト全体の主題はサバ軍のハドラマウト遠征であるが、本稿のテーマから見て最も興味あるのは、奉献者の称号 Kbr/'rb/mlk/Sb'/wKdt/wMḏḡm/wḤrm^m/wBhl^m/wZyd'l/wkl/'rb/Sb'/wḤmyr^m/wḤḏrmt/wYmnt である。まず 'rb/mlk…/wZyd'l の性格については12—14行目から手懸りが得られる。ここで奉献者は、配下の精鋭部隊 (tmhrt) と、ナシュク (Našq)・ナシャーン (Našān) 両市の市民軍を率いているが、そのうち前者は「サバ王のベドウィンとキンダのそれ 'rb/mlk/Sb'/wKdt」から成っていた。さらに20—21行目で、この同じ部隊が「両市とマールブの遠征軍 msb'/hgrnhn/wMrb」と呼ばれていることから、この精鋭ベドウィン部隊が通常マールブに駐屯していたことが判明する。中でも「サバ王のベドウィン」は、おそらく王直属の親衛隊であったのであろう。Mḏḡm^m 以下の族名を見ると、既述の如くマズヒジュはキンダとともに王国を形成していた部族で、後者とともに南アラビアに移動したと思われる。また Bhl^m は、Ja 660 においても、キンダ、マズヒジュと並べて名を挙げられていることから、この両者との緊密な関係がしのばれる。Ḥrm^m, Zyd'l^m について未詳とはいえ、マズヒジュ以下の諸族もキンダ同様、精鋭軍の一翼を担っていたと見てよいのではあるまいか。以上より、'rb/mlk/…wZyd'l は、王直属のベドウィン親衛隊とキンダを中心とする諸族のベドウィン部隊より成る精鋭軍で、通常首都のマールブに駐屯して王の軍事力の中核をなした部隊、と解してよいであろう。

一方、kl/'rb/Sb'/… については、Sb' 以下の部分が、サバ王の称号 MY より窺える当時のサバ・ヒムヤル王国の領土に等しいことに注目すべきである。

よって, *kl/'rb/Sb'/...*は, 王国全土のすべてのベドウィンと解せるが, これは, 首都配属の特別部隊を除いた, 諸地方のベドウィン部隊をさすのであろう。かくして, 奉献者が, 首都の精鋭ベドウィン部隊と地方の全ベドウィン部隊を統轄する長官 (Kabir) の重職にあったことが判明した。

19. Ir 32

アッワーム神殿のイルムクフ神への奉献文。奉献者は名前・称号ともに *Ja 665* と同一。⁽³⁵⁾ 6—7行目によると, 奉献者は王により「配下のベドウィン精鋭部隊 *tmhrthw/'rbⁿ*」とともに, ハドラマウト軍の攻撃からナシュクを防衛するため同市に派遣された。そして王命を受けて, そこからさらにハドラマウトへ向けて遠征を行なったが, その時彼が率いた軍勢は, 12—13行目によると, 「マールブ市民から召集されたサバ部族軍 *š'bⁿ/Sb'/b'l/Mrb*」と, 「サバ王の直属部族とキンダ・ナジュラーン・*Sfln* の部族部隊から成るベドウィン軍 *'rb/mlk/Sb'/wKdt/wNgrn/wSfln*」で編成されていた。16—19行目には, 彼の率いる部隊は, 当初サバ部族軍300人,⁽¹⁶⁾ 「ベドウィン」軍300人に騎馬20騎にすぎなかったが, 後に騎馬50騎が補充されたと記されている。

20. CIH 397

'w'l 神殿のイルムクフ神への奉献文。奉献者は, *S'dt'lb* (*Ja 665* と *Ir 32* の奉献者) の率いるハドラマウト遠征軍の一員であった。7—8行目に, 遠征軍が「サバ部族 *š'bⁿ/Sb'*」部隊と「ベドウィン *'rbⁿ*」部隊で編成されていたとある。

21. Ja 671

アッワーム神殿のイルムクフ神への奉献文。10行目によると, 奉献者達は, おそらく崩壊した堰堤の補修に際して, 「ベドウィン部隊 *hmsⁿ/b'rbⁿ*」の指揮をとった。

22. Ry 509

ヒムヤル王に率いられた南アラビア諸族の中央アラビアへの遠征を記念する

岩石刻文。9—10行目によると、「キンダをはじめとする諸族から成る王麾下のベドウィン部隊 'rbhmw/Kdt/wSwd/wWlh/w…」も従軍している。遠征の目的地とされている Mwdm/Dmw の比定は困難であるが、刻文の残されているワディ・マーシルの近辺であるのは間違いなかろう。遠征の目的・性格については、軍事的遠征という解釈と、南アラビア諸族の北方への移住の一つという解釈とに分かれる。前者は、アラブの伝承にヒムヤル王トゥッバ (Tub-ba' ibn Karib, 本テキストの 'bkrb/'s'd に比定される) がイラクに遠征したと伝えられていることを根拠としているが、それにしては、テキストに戦いの相手や経過に関する記事が全く欠けているのは奇妙である。ともあれ、ヒムヤル王の王号にこの 'bkrb 以後「ベドウィン 'rb」の名が加わって MA となったのを見ると、中央アラビアから紅海沿岸部へかけてのベドウィンは一時的にせよこの王の時代にヒムヤルの支配下に置かれたものと思われる。本稿のテーマより見てもう一つ興味深いのは、アラブの伝承ではキンダの建国がこの 'bkrb の遠征と結びつけられている点である。それによると、トゥッバによって征服された中央アラビアにキンダ王国が建てられたが、その王には、トゥッバの息子ハサン (Ḥasan) の異父 (異母?) 兄弟フジュール (Ḥuḡr Ākil al-Murār) が立てられたという。⁽³⁸⁾ このハサンを 'bkrb の息子で彼の遠征に同行した Ḥśn/Yh'mn に比定できることには異論がない。またフジュールについては、カウカブ (Kawkab) の北東 10 km ほどの地点で発見された graffiti (未刊行) に見える Ḥgr/bn/'mr/Mlk/Kdt がこれに相当するのではなかろうかと言われている。⁽⁴⁰⁾ 100年ほど前にイムルルカイスの攻撃を受けて崩壊したキンダの王国は、ヒムヤル王の援助の下にヒムヤル系の王を戴いて再建されたようである。

23. Ry 510

'bkrb の遠征の約100年後、再びヒムヤル王に率いられた南アラビア軍の中央アラビア遠征が行なわれたが、本テキストはそれを記念する岩石刻文である。この遠征に、南アラビアの諸部族とともに、「キンダとマズヒジュから成る王麾下のベドウィン部隊 'rbhmw/Kdt/wMdh[g^m)」も従軍したことが、7—8行目に記されている。4—6行目によると、遠征の目的は、ヒムヤルに「反抗

的なベドウィン '*rbⁿ*/qsdⁿ」の討伐にあったようであるが、遠征軍は Mdr^m と戦わねばならなかった。この Mdr^m はヒーラのアル・ムンジール (al-Mu-ndir) 3 世に比定されている。つまり今回の遠征は、中央アラビアの支配を巡るヒムヤルとヒーラの勢力争いを背景に行なわれたものであった。

24. Ja 1028

Ywsf の、アビシニア軍及びこれに荷担する南アラビアのキリスト教徒に対する戦勝を記念する岩石刻文。Ywsf はアラブ伝承のユダヤ教徒の王ズー・ヌワース (dū-Nuwās) に比定される。南アラビアにおけるユダヤ教とキリスト教の影響は4世紀後半より顕著になり、夫々の信徒は互いに厳しく対立しながら勢力拡大を図っていた。特に後者は、同信の誼からアビシニアのアクサム王国と結び、その南アラビア侵略に手を貸す傾向があった。これらアビシニア勢力とキリスト教勢力を一掃することを狙った Ywsf の遠征は、ザファール (Zafār) を発し、西へ下ってモハ (al-Mohā) を中心とする紅海沿岸地方に至り、さらに北へ進んで南アラビアにおけるキリスト教の最大の拠点ナジュラーンを制圧することによって完了した。7行目によると、このうちナジュラーン遠征軍には、「定住民とベドウィンから成るハムダーン部族軍 š'b/ḏHmdn/hgrⁿ/w'*rbⁿ*」と「キンダ・ムラード・マズヒジュのベドウィン軍 '*rb*/Kdt/wMrd^m/wMḏhg^m」が加わっていた。当時サバの西部高地帯では、ハーシド、バキール両部族間の統合が進み、新しい集団は支配氏族の名をとってハムダーン部族と呼ばれていた。⁽⁴³⁾そして興味深いのは、本テキストの上掲部分より明らかなように、この部族が定住民とベドウィンから成っていたという点である。元来、外来の侵入者で、生活様式・社会構造を異にするベドウィンが、この頃には南アラビア社会の内部に構造的に組込まれる事態も生じていたのである。ここでは、南アラビア社会の変質に注目すると同時に、ベドウィン自身の変貌をも見逃す訳にはいかない。

25. Ry 507

戦勝記念の岩石刻文。内容は Ja 1028 とほぼ同じ。Ysf 軍にベドウィンの加わっていたことが2行目 ('*rbⁿ*)、8行目 ('*rbⁿ*)、9行目 (š'b/ḏHmdn/w

'rbⁿ) に見える。9 行目の記事は、Ja 1028 の 7 行目に相当し、ナジュラーン遠征軍の主力がハムダーン部族軍とベドウィン軍で編成されていたことを示している。

26. Ry 508

戦勝記念の岩石刻文。内容は Ja 1028, Ry 507 とほぼ同じ。7 行目によると、ナジュラーン遠征軍には、「定住民とベドウィンから成るハムダーン部族軍 'š'b/dHmdn/whgrhmw/w'rbhmw」と「キンダ・ムラード・マズヒジュのベドウィン軍 'rb/Kdt/wMrd^m/wMdḥg^m」が加わっていた。

27. CIH 541

525年以來、南アラビアはアビシニア人の支配するところとなっていた。本テキストは、アビシニア人支配者アブラハ ('Abraha) によるマーリブダムの補修を記念した碑文である。ダム補修に先立って、キンダの反乱の鎮定されたことが記されているが、49, 65行目にはこの反乱への荷担者として「ベドウィン 'rbⁿ」の名が見える。

註

- (1) 本稿においては、ヘニンガー (J. Henninger, “La société bédouine ancienne”, *ASB*, 70—71) の次の定義に基いて「ベドウィン」という語を使用している——“C'est surtout le *caractère guerrier*, intimement lié à l'élevage du chameau, et une certaine forme d'*organisation tribale* qui constitue le sujet principal de cette étude.” Cf. W. Dostal, “The Evolution of Bedouin Life”, *ASB*, 14—15.
- (2) この語の用例は、西暦紀元前の南アラビア碑文には全く見られず、紀元後 1 世紀も半ばを過ぎる頃に初めて現れる。またこれと相前後して、南アラビアには馬が導入され、碑文中の語彙や人名には北アラブ系要素の強まるのが看取される。このことから、この語が北方起源の外来語で、北方より南下した所謂ベドウィンをさすことには、一部の研究者 (ex. *JaRSRI*, 17—18) を除いて異論はない。
- (3) 11行目の 'šḥb をビーストン (*BeQ*, III, 10, 72) は疑問符付きで “bedouin auxiliaries” と訳している。Cf. Ry 533/21.
- (4) Cf. *JaSIMB*, 37.
- (5) š'bⁿ/Ḥšd^m. 古代南アラビア語における š'b は、一般に「様々な規模の定住民の共同体」と解されている。規模に関しては、小は部落程度のものから、大は国家に匹敵する領域を含む部族連合に至るまでの様々なレベルの集団が、碑文の中では等

しく š'b と呼ばれている。また、元来はその適用は定住民に限られ、ベドウィンに対して用いられることはなかったが、南アラビアへのベドウィンの浸透が顕著になるにつれて、後には後出の Ja 1028 や Ry 508 に見られるように、その適用範囲にベドウィンをも含むようになった。もっともこれは、š'b の語義の変化というより、š'b という語で示される社会集団そのものの構造変化として捉えられなければなるまい。遊牧民たるベドウィンの集団が血縁を最大の結合原理としていたのに対し、定住社会南アラビアの集団 š'b は、経済的・政治的な契機による集団で、非血縁的であることを最大の特徴としていた。本稿では、他に適当な訳語がみつからぬ儘、便宜的にこれを「部族」と訳すことにする。尚、š'b に関する最近の研究として、次の文献を参照——*BeKASA*, 258—260; *BeQ*, III, 2—3; *HöBVAI*, 61—62; *JaRSRI*, 19; A. G. Lundin, “Le régime citadin de l'Arabie du Sud aux II^e-III^e siècles de notre ère”, *PSAS*, III, 1973, 27; *RoPH*.

- (6) bn/Hmdn. bn は bnw, bny と表記される(同一碑文内においてもヴェリエーションあり)が、これらの語を冠された集団は、少くとも理念的には同一祖先を戴く血族と解されている。š'b 同様、規模には相当の変差があったようであるが、本稿では一応「氏族」という訳語をこれらの血縁集団にあてることにする。尚、ハムダーン族については後出の CIH 353, Ja 1028, Ry 507・508 を参照のこと。
- (7) 「サバ及びヒムヤルの王」を意味する MR という王号出現の時期や、『エリュトラ海案内記』第23節の記事から見て、この連合国家形成は1世紀半ば以前に溯ると考えてよからう。両勢力が連合するに至った経緯は未詳であるが、主導権がサバの側にあったことは、王号の中でサバの名がヒムヤルのその前に置かれていることや、ヒムヤルがサバの国家神イルムクフの祭儀に参加していることなどに窺える。因みに、部族連合の性格の濃かった当時の南アラビア国家では、国家神の祭儀への参加を通じて、部族間の結束の確認と強化が図られたようである(Cf. A. F. L. Beeston, “Theocracy of the Šayhad Culture”, *PSAS*, VII, 1977, 8—9)。尚、本稿の対象となっている時代のサバ部族連合の内部は、部族間の対立・抗争でかなり混乱していたが、殊にヒムヤルは半独立の状態にあった。
- (8) Cf. *RoPH*, 48.
- (9) Ja 716/7 に š'bⁿ/Sfln とあるところから、部族名と解したい。しかしこれには異論もあり、また部族名と解した場合にもその位置については必ずしも明らかではない。次の 'šr とともに、稿を改めて検討することとしたい。Cf. *BeQ*, I, 12; *Ibid.*, III, 6; *RycH*, IV, 501.
- (10) 'šrt の複数形。ビーストン(A. F. L. Beeston, “Notes on Old South Arabian Lexicography”, VII, *Le Muséon*, LXXXV, 1972, 543)はこれを“groups organized on the bedouin basis of genealogy”と定義し、“groups of sedentaries organized on a territorial and not a genealogical basis”である š'b と対照的に捉えている。問題の重要性に鑑み、稿を改めて論じたい。Cf. *BeKASA*, 258—259; *BeQ*, III, 3; *JaSIMB*, 115; *RycH*, loc. cit.
- (11) Ir 17 にやはり Sfln とともにハムダーン族の敵として挙げられている。族名と

思われるが詳細不明。Cf. *BeQ*, III, 32 ; *RycH*, loc. cit.

- (12) Cf. *RycISA*, 104.
- (13) アビシニア人の南アラビア侵入については、拙稿「エリュトウラー海案内記の成立年代について」、『史学雑誌』第85編第1号、1976年、34頁、及び36頁の註4を参照のこと。
- (14) Cf. *WisGL*, 67, Abb. 1.
- (15) Cf. *RycH*, III, 247.
- (16) これをビーストン (*BeQ*, III, 24) は “Arab (troops), Arabs”, J. リックマンズ (*RycH*, III, 246) は “Arabes” と訳しているが、両者ともにこの部分のテキスト原文を示していないので、'rb か 'rb かは不明。
- (17) 碑文の中では Shrt^m, Shrtⁿ , という形で現れる。Cf. *BeQ*, III, 6 ; *RycH*, IV, 508 ; *WisGL*, Abb. 1.
- (18) 南アラビア碑文の中にキンダの名が見えるのはこれが最初。キンダについては以下の文献を参照——*ET*², 526—527, “al-‘ARAB” ; *HiHA*, 84—86 ; *HöBVAI*, 65—67 ; *JaSIMB*, 318—319 ; *PiIRy* 535, 171—178 ; J. Ryckmans, “CR de R. Dus-saud, *La pénétration des Arabes...*”, *Bibliotheca Orientalis*, XV, 1958, 142 ; *WisHAH*, 478—489.
- (19) ヴィスマン (*WisGL*, 182, Abb. 1) はこれをプトレマイオスの挙げる Katanitai に比定し, al-‘Arid の西に置いている。
- (20) Cf. *BeQ*, III, 6 ; *RyISA*, XV, 113 ; J. Ryckmans, “Alphabets, Scripts and Languages in Pre-Islamic Arabian Epigraphical Evidence” (A Main Paper presented to the Second International Symposium on Studies in the History of Arabia : Pre-Islamic Arabia, University of Riyadh, 13—20 th April, 1979), 4 ; *WisGL*, 178—179.
- (21) 南アラビア碑文中に見える l'sd, l'sd が, 北アラビアの Asad 族ではなく, Asd (=Azd) 族 (Azd as-Sarāt, Azd 'Omān) であることについてはミュラー (*MüS-GKS*, 159—161) に従った。Cf. *WisGL*, 185, 397—398.
- (22) Cf. *Ibid.*, 184—185, Abb. 1.
- (23) *Hwln/hdln*. マーリブの西から南西にかけての地方。Cf. *BeQ*, III, 5.
- (24) ジャム (*DoJaNSI*, 15) は奉獻者の仕事を軍事的遠征と解しているが、それにしてもその種のテキストには付物の戦闘の経過や結果に関する記事がここには全く見当たらない。ミュラー (*MüSGKS*, 100) の説くように、使節派遣と解すべきであろう。
- (25) Cf. *ET*², 683—684, “ASAD” ; *WisGL*, 192—193.
- (26) Cf. *ET*¹, 88, “Madhḥidj” ; *JaSIMB*, 316 ; *RycIHS*, 329—330 ; A. Sprenger, *Die Alte Geographie Arabiens*, Bern, 1885, 275 ; *WisGL*, 175, 194—195, 403—405 ; *WisHAH*, 488—489 ; *WisHöBHG*, 59, 83, 117. 別稿においてキンダを論ずる際に改めて検討したい。
- (27) Cf. *BeQ*, III, 11 ; *JaRSRI*, 17 ; *JaSIMB*, 60.
- (28) 永く覇権争いの続いたサバ部族連合も、3世紀末以降は専らヒムヤル系王朝の支

配するところとなった。しかしこの王朝の王達は、少くとも当初は、征服者としてサバを支配するのではなく、あくまでもイルムクフ神の祭儀の執行者として、即ちサバ部族連合の盟主として振舞った。したがって碑文の中でも、この時代の王はヒムヤル王とは呼ばれず、依然としてサバ王と呼ばれている。

〈29〉 *JaMAA*, II, 31 ではこの部分は Qtbn/wKdt となっている。

〈30〉 RES 483. Cf. F. Altheim & R. Stiehl, *Die Araber in der Alten Welt*, II, Berlin, 1965, 313—320; A. F. L. Beeston, “Nemara and Faw”, *BSOAS*, XLII, 1979, 2—6; R. Dussaud, *La pénétration des Arabes en Syrie avant l'Islam*, Paris, 1955, 63—64; *WisGL*, 403—405.

〈31〉 イムルルカイスの遠征は、南アラビア北部のナジュラーンにまで及んだ。ナマール墓誌中にキンダの名は見えないが、彼等の領域は遠征軍の通過路に当たっており、また前出 *Ja* 2110 において彼等とともに王国を形成していたマズヒジュの名が、討伐を受けた部族の一つとして挙げられているところから、キンダを中核とする中央アラビアの王国が、イムルルカイスの攻撃を受けて崩壊したのは間違いのないと思われる。

〈32〉 Cf. *BeQ*, III, 10, 66.

〈33〉 Cf. *WisGL*, 194.

〈34〉 Cf. *Ibid.*, 201.

〈35〉 *RycH*, V, 211 による。

〈36〉 Cf. *RycIHS*, 327.

〈37〉 テキストには M'sl/Gmḥn と記されている。リヤードの西方 200 km あまりの地点。

〈38〉 Cf. *El*², 885, “BADW”; J. Ryckmans, *L'institution monarchique en Arabie méridionale avant l'Islam (Ma'in et Saba)*, Louvain, 1951, 215—216.

〈39〉 Cf. *HiHA*, 85; *HöBVAI*, 66.

〈40〉 Cf. *Ibid.*; *PiIRy* 535, 172—174.

〈41〉 ビーストン (*BeCRCaEA*, 295—296), ロダンソン (*RodES*, 1966/1967, 136—137) に従った。Cf. *RyISA*, X, 309—310; *RycIHS*, 328.

〈42〉 Cf. *El*¹, 784, “Murād”; *RycIHS*, 338; *WisHAAH*, 488—489; *WisHöBHG*, 36.

〈43〉 Cf. *RoPH*, 48—49.

(東京大学文学部助手)

表: 'rb ('rb) に言及した南アラビア碑文

No.	テキスト	場所 ⁽¹⁾	王	名	年代 A. D. ⁽²⁾	出	典
1	Ja 560	Márib	Nš'krb/Yh'mn/MS/bn/Dmr'ly/Drh		1 C 中頃～後半	JaSIMB, 31-36. Cf. BeQ, III, 57-58.	
2	Ja 561 bis	Márib	Whb'l/Yhz/MS		2 C 初	JaSIMB, 37-39. Cf. BeQ, III, 22-23.	
3	CIH 343	Damhán ⁽³⁾	ナ	シ	2 C ? ⁽⁴⁾	CIH, I, 405-408. Cf. WisGL, 336.	
4	Ja 629	Márib	S'dšmsm/'sr'/MR/wbñhw/Mrtdm/ Yhmd/MR/bny/'lšrh/Yhdb/MR Yd'tl/MH Nḃm/MQ		2 C 前半	JaSIMB, 128-131. Cf. BeQ, III, 43-45.	
5	CIH 353	Wa'trán ⁽⁵⁾	[Šm]r/Yhr'š/MR	Yrm/'y[mn] ⁽⁶⁾	2 C 中頃	CIH, I, 429-434.	
6	G1 1177 ⁽⁷⁾	Šibām Suhaym ⁽⁸⁾	ナ	シ	2 C ? ⁽⁹⁾	SchSI, 14-20. Cf. JaPIRM, 117-118; RyISA, X, 270-273; RycIHS, 322.	
7	CIH 79	'Amrán	ナ	シ	2 C 中頃 ～後半 ⁽¹⁰⁾	CIH, I, 121-124.	
8	NaNAG 13-14	Ḥimyar 領内 ⁽¹¹⁾	'lhn/MS	Yd'tb ⁽¹²⁾	2 C 後半	RycISA, 102-108. Cf. WisHAH, 469-471.	
9	CIH 350	Zabbād ⁽¹³⁾	ナ	シ	2 C 後半 ⁽¹⁴⁾	CIH, I, 419-424. Cf. BeQ, III, 43.	
10	Ir 12	Márib	Š'rm/'wtr/MR/bn/'lhn/Nhfn/MS		2 C 末	BeQ, III, 23-24. Cf. RycH, III, 245-247.	
11	Ja 635	Márib	Š'rm/'wtr/MR/bn/'lhn/Nhfn/MS		2 C 末	JaSIMB, 136-138. Cf. BeQ, III, 24-25.	
12	Ja 2110	Márib	'lšrh/Yhdb/MR/w'h'yhw/Y'z'l/ Byn/MR/bny/Fr'm/Ynhb/MS		2 C 末 ～3 C 前半	DoJaNSI, 15-16.	

13	Ja 739	Márib	ナ	シ	2 C 末~ 3 C 前半 ⁽¹⁵⁾	JaSIMB, 215-216.
14	Ja 758	Márib	ナ	シ	2 C 末~ 3 C 前半 ⁽¹⁵⁾	JaSIMB, 227-228.
15	Ja 950 ⁽¹⁶⁾	al-'Uqla	ナ	シ	3 C 初 ⁽¹⁷⁾	JaUT, 50.
16	Ja 961	al-'Uqla	ナ	シ	3 C 初 ⁽¹⁷⁾	JaUT, 53.
17	Sh 32	Márib	Šmr/Yhr's/MR/bn/Ysrm/Yhn'm/MR		300年前後	BeQ, III, 51-59. Cf. JaMAA, II, 31.
18	Ja 665	Márib	Ysrm/Yhn'm/MY wbnyhw/Dr'mr'/ymn/MY		4 C 前半	JaSIMB, 169-172. Cf. BeQ, III, 52-53.
19	Ir 32	Márib	Dmr'ly/Yhbr/MY		4 C 前半	BeQ, III, 53-55. Cf. RychH, V, 209-215.
20	CIH 397	Širwāḥ	ナ	シ	4 C 前半 ⁽¹⁸⁾	CIH, II, 55-58. Cf. BeQ, III, 55.
21	Ja 671	Márib	T'm/Yhn'm/MY/ wbahw/Mlkkrb/Y'mn/MY		4 C 中頃~後半	JaSIMB, 176-178.
22	Ry 509 ⁽¹⁹⁾	Wádi Másil	'bkrb/'s'd/MA/wbnwhw/Hšn/ Yh'mn/MA/bny/Hšn/Mlkkrb/ Yh'mn/MY		5 C 初	RyISA, X, 303-307. Cf. BeCRCaEA, 293-294.
23	Ry 510 ⁽²⁰⁾	Wádi Másil	M'dkrb/Y'fr/MA		516年 ⁽²¹⁾	RyISA, X, 307-310. Cf. BeCRCaEA, 294-296; RodES, 1966/1967, 131- 139; SmEA, 460-461.
24	Ja 1028	Ḥimá	Ywsf/'s'r/Yt'r/Mlk/kl/'š'tn]		518年	JaSHI, 39-45.
25	Ry 507	Ḥimá	mlkn/Ysf/'s'r		518年	RyISA, X, 284-295. Cf. BeCRCaEA, 296-302; RodES, 1965/1966, 131-140.

26	Ry 508	Kawkab	mlkn/Ysf/'s'r	518年	RyISA, X, 295-305. Cf. BeCRCAEA, 296 ; RodES, 1966/1967, 122-131 ; SmEA, 458.
27	CIH 541	Márib	'brh/'zly/Mlkn/ 'g'zyn/Rmhś/Zbymn/MA	542~543年	CIH, II, 278-296. Cf. SmEA, 437-441.

MS : Mlk/Sb', MR : MS/wdRydn, MY : MR/wHđrmwt/wYmnt, MA : MY/w'rbbmw/twdm/wthmt,
MH :Mlk/Hđrmwt, MQ : Mlk/Qtbn

〔表に関する註〕

- (1) 碑文の作製地。奉献文の場合は奉献の行なわれた神殿の所在地。
(2) 特に注記のない場合、各テキストの年代判定の根拠は、碑文中に言及されている王の在位年代。西暦 1—4 世紀の南アラビア諸王の在位年代については、拙稿「古代南アラビア史のクロノロジーに関する一考察」、『オリエント』第19巻第1号, 1976年の表1を参照のこと。
(3) Cf. *WisGL*, 334, Abb. 17.
(4) バレオグラフィーによる。
(5) Cf. *Ibid.*, 314, Abb. 17.
(6) Yrm (後に MS と称す) は、ここではまだ王号をとっていないが、テキストの年代を示す指標とするためここに挙げた。
(7) =Ry 502=Ja 2131.
(8) Cf. *SchSI*, 16 ; *WisGL*, 374, Abb. 17. テキストの発見されたのは Šibām Suhaym 近郊の al-Gīrās。
(9) Cf. *RycIHS*, 321.
(10) バレオグラフィーによる。
(11) Cf. *RycISA*, 104 ; 『オリエント』第19巻第1号所収の上掲拙稿, 39頁。
(12) 王号は欠けているが, Yd''b/Ġyln/MH であることは間違いないので挙げた。
(13) Cf. *WisGL*, 373, Abb. 17.
(14) バレオグラフィーによる。
(15) 奉献者の主人である Nmrm/'wkn と Ghđm/'ḥen の名は Ja 594/4—5 に見えるが, このテキストにはまたサバ王 'Išrh/